

女新聞

2018/5/28

編集・発行
飯島可琳

東日本大震災復興祈念 特別展

東大寺と東北 観覧報告

四月下旬から多賀城市の東北歴史博物館で東日本大震災復興祈念 特別展『東大寺と東北』が開催されている。初めて東北に足を運んで実感したことは、大仏造立や大仏再興の折などに、多賀城市を含む東北地域が奈良と関わりを持っていたことである。

戦火で焼けてしまった東大寺を復興するため、鎌倉時代に東大寺の重源上人が資金集めに尽力している。奈良から遠く離れた東北からの支援は大きかった。遡ってみると、砂金の産地だった陸奥国には、奈良時代の大仏造立の折にも金を献上してもらっている。さらに遡ると、奈良時代に大和朝廷が現在の宮城県に「多賀城」という鎮守府を設置したのが東北

と奈良とのつながりのはじまりと言えるだろう。『東大寺と東北』展の開催地である多賀城市と奈良の関わりはこれほど長い。奈良と関わりのある地域で勧進しようという発想は、ごく自然であると思われた。しかし実際の事情はもう少し複雑であるようだ。会場にあった頼朝の書状は、重源に対し、奥州藤原氏の支配する東北地方へ勧進に行くことを薦めている。書状の時期を時代の流れに位置づけてみると下の年表のようになって、頼朝の書状には大仏復興以外の目的があったと考えざるを

得ないのである。

会場の説明プレートによると、頼朝ばかりでなく後白河法皇も同様の意向であったらしい。大仏と大仏殿の修繕にあたり奥州に求められたのは鍍金用の「金」三万両である。このときの「金」の量を現在の「金」価格に置き換えて換算すると、三〇億円近くになるだろうか。

いくら奥州藤原氏が有力氏族だといっても巨額であることに違いないし、資源としての砂金をすべて独占するのは難しい。他の人が入手することもあるだろうから、言われた量

「東大寺と東北」展に関する年表（筆者作成）

西暦	年	出来事	出典
1184	寿永3年6月23日	秀衡が5千両、頼朝が千両を大仏減金料としておさめる	玉葉
1185	文治元年8月27日	大仏開眼	東大寺辞典
1186	文治2年8月16日	西行が奥州に赴く	吾妻鏡
1186	文治2年?月	秀衡が450両を東大寺に貢金	展覧会パネル
1187	文治3年2月10日	義経が秀衡を頼って奥州に赴く	吾妻鏡
1187	文治3年4月	秀衡が金3万両を頼朝と後白河法皇から要求される	玉葉（9月29日の記述）
1187	文治3年10月29日	秀衡病死	ブリタニカ
1188	文治4年9月8日	頼朝が重源に奥州に勧進に行くように勧める	展覧会図録
1189	文治5年4月30日	衣川の戦い 義経を泰衡が自害に追い込む	ブリタニカ
1189	文治5年8月21日	奥州征伐 秀衡が頼朝に追い込まれ、部下に殺される	ブリタニカ
1194	建久5年	頼朝が大仏光背用に砂金130両をおさめる	展覧会パネル
1195	建久6年	大仏殿落慶	東大寺辞典

※年代には諸説ある。展覧会とは「東大寺と東北」展を指す。

をすぐに献上することは困難だろう。

頼朝が奥州藤原氏を攻めるつもりであれば、頼み事をして借りをつくるようなことをあえてするだろうか。寄付する側（奥州藤原氏）だけではなくて、寄付される側（東大寺）にも働きかけて、東北を資金調達先に決めようとしたことには、別の理由があるのではないか。

そこで私は仮説をたてた。頼朝の提案は、奥州藤原氏に財政的負担を強いるためではないかというものだ。例えば江戸時代の参勤交代は大名の余力を削ぐための政策であった。仮に勧進が政治的なものだとわかって、奥州藤原氏が頼朝や上皇の命に背くことができただろうか。しかも、献上した金は「東大寺」の復興に使われるわけだから、資金援助を断れば不信心と思われかねないのである。奥州藤原氏が財政に苦しめば討伐しやすくなるという発想が頼朝にあってもおかしくはない。

言い方を変えれば、頼朝ほどの人物が策を弄して財政力を削いでおかなければならないほどに、奥州藤原氏の勢力が強大であったのかも知れない。このたび平泉の中尊寺で、奥州藤原氏の栄華を目にしてそう確信できた。

快慶作「地蔵菩薩立像」の造形

会場で地蔵菩薩を見ていて気になったことがある。目尻の表現である。彫られた線がある一方で、墨のようなもので描かれた線もある。二つの線の重なりで目尻が表現されている。目尻の線こそが、見る者に「端正な顔立ち」という印象を与えるのではないかと考えた。

目尻の末端を筆の線で描くことで線の太さを極限まで絞ることができる。そのことによって、目に繊細な雰囲気を与えることができる。目尻をよりシャープに表現するために筆で書き足したのか、それとも凹凸のみでは描き切れない目尻の微妙な曲線を表現したかったのか。いずれであるにせよ、快慶はかなり目尻の表現に執着していたように思える。

ところで快慶の人生を通して「作りたい仏像」の方向性は変わっていないのだろうか。初期の弥勒菩薩像から末期の阿弥陀如来像に至る快慶仏の中でも、とりわけ如来と菩薩の作風に共通するところがあるよう感じられる。端正な顔立ちを印象づける切れ長の目と薄い唇、整った衣褶と截金の文様など、快慶が残した仏像の多くに見られる特徴は、東大寺と東北

展に展示される東大寺所蔵の地蔵菩薩立像にもしっかりと見て取ることができた。

あくまで仮説であるが、快慶は一つの仏像の完成にこだわり続けると言うより、複数の仏像を作りつつ改良を重ね、理想型に近づけていくような傾向があるのではないか。本当にそう言えるのか、運慶や快慶の仏像の特徴を追究してみたいと考えているところである。



撮影許可をくださり、ありがとうございました。

東日本大震災復興祈念 特別展

『東大寺と東北－復興を支えた人々の祈り－』

2018/4/28～2018/6/24（東北歴史博物館）